



OVERSEAS

Philippines —フィリピン—

海外事情【寄稿】



ピナツボの麓にて



小西知行 KONISHI Tomoyuki
株式会社オリエンタルコンサルタンツ
GC事業本部/道路開発部/技師上級

今世紀最大の噴火から15年経過した2006年9月から約1年半、ODA案件の技術者として、フィリピンのピナツボ火山麓の町アンヘレスに滞在する機会を得た。ここでは、そのピナツボ山とその周辺状況、及び従事した道路建設事業において印象に残った出来事を紹介する。

成長するピナツボ

アジア南東部に位置し多数の

島から構成されるフィリピンには、約300の火山が点在し、そのうち22は「活火山」、27は「活火山の可能性ある」と分類されている。活火山に分類されるピナツボ山はルソン島中央部、首都マニラの北西約90kmに位置し、1991年6月に大噴火を起こした。噴火により山頂が吹き飛ばされ、直径2.5kmのカルデラが出現し、後に火口湖ができた。特に6月15日の20世紀最大規模と言われる大噴火で

は噴煙が成層圏に達し、その後の北半球の気温を0.5~0.6℃下げたと言われている。

地元の人々は、当時の状況を「噴火の煙や灰(ラハール)によって数日間は夜のように暗くなり、この世の終わりを覚悟した。火山灰は2m以上積もった」と語る。その言葉からも、その凄まじさが容易に推測できる。500年前にも大噴火している形跡があり、ピナツボとは地元の言葉で“成長する”とい



図1 ピナツボ山位置図



写真1 ピナツボ山噴火時



写真2 ジープによる悪路踏破



写真3 トレッキング開始

う意味があるらしく、名前からしても活動中のようである。

現在も噴火の可能性を否定できないピナツボ山であるが、フィリピン政府は同山を観光資源として活用できないか模索している。

ピナツボ・トレッキング

その観光としてお勧めなのが「ピナツボ・トレッキング」である。麓の町から専用のジープに乗り込んで約1時間、まるで雪が積もったような白いラハールが堆積した河

川敷の道なき道を遡る行程は、自然の脅威や大噴火の凄まじさを実感させてくれる。ジープによる悪路踏破は、そこらにある遊園地のアトラクションよりもスリルがあり、お尻が痛いとか、頻繁に足をぶつける等は我慢するしかない。雨季にこの道は完全に河川になって使用できなくなるため、毎年通行できる箇所が変わるらしく、専用の運転手とガイドが必要である。ジープで行ける所まで登るが、そこは運次第。乗ったジープの性能と運

転手の腕で到達地点が変わる。運が良ければ、その後のトレッキング距離が短く済む。なお、途中でジープが故障しても文句は言えない。行かれる際にはそれなりの覚悟が必要である。

これ以上ジープでは不可能という所まで来たら、トレッキングの開始である。そこからはこれまでの白色世界が一転し、大小の岩の間をすり抜けて歩くことになる。何の種類かの岩なのか詳しく分からないが、赤茶色や硫黄色の岩石



写真4 ピナツボ遊泳



写真5 先住民族のアエタ族と



写真6 ラハールを用いた路盤

や軽石、雲母や長石を含んだ花崗岩らしきものが一面に広がっている。

1時間程度のトレッキング後、目前に人工的に作られた階段が現れ、それを上ると視界が急に開け、山頂の巨大なカルデラ湖が迎えてくれる。

さすが、山頂が吹っ飛んだ世紀の大噴火の火口だけあって、なかなかの迫力である。写真で見えていたカルデラ湖は美しいターコイズ色であったが、何故か褐色に黒ずんでいて少しガッカリである。ガイドに聞くと、ホントか嘘か「最近小さな噴火があったためにその影響で褐色になった」と言う。

素晴らしい景色であるが、付近には簡素な自然に出来た展望台しかなく、記念撮影をして景色を眺め、15年前の大噴火をイメージする以外には何もない。日本だったら休憩する茶屋があって売店があって記念写真を撮ってくれる写真屋さんがいたりしそうな所であるが、何もない。自然を売りにし

ているのでそんなものは必要ないのだろうが、少し拍子抜けした。

そして、ガイドが言った小規模な噴火という言葉に少々ビビリながらも、せっかく辛い思いをして山頂まで来たのだからと思い、遊泳禁止の褐色のカルデラ湖で泳いでみた。湖は急深でまったく足は



写真7 高速道路とラハールの堆積した河川

着かない。仰向けに浮かびながら周囲の外輪山を眺めていると、何とも不思議な気分である。そして水の味は、火口湖のためか鉄と硫黄が混じったような、なんとも言えない苦い味であった。

後で聞いた話であるが、火口湖の水質検査では砒素が確認されているらしい。けれど、味見をしてしまったものは仕方がない。体に悪影響が出ないことを祈るとともに、行かれた際は、「遊泳しないよう」「味見をしないよう」をお願いしたい。

先住民族

トレッキングの道中、先住民族のアエタ族に出会った。その時は男性が一人もいなかった。おそらく仕事か狩りにでも出かけているのだろう。ものすごくシャイな人達で、写真を撮られるのも恥ずかしそうにしていた。

実は、噴火の被害を最も受けたのはアエタ族である。山の斜面や山麓には、スペイン人の迫害から逃れるために低地を捨てた

アエタ族が、数世紀にわたって住み着いていた。火砕物と火山泥流の堆積で多くの村が壊滅し、アエタ族は以前の生活に戻れなくなった。数年経って破壊を免れた村の住人は村に戻ったが、多くの人々は政府が作った再定住地に移住することとなった。こういった場所の環境は劣悪で、世帯ごとに耕作に向かないわずかな土地が与えられただけであったと言う。

現在、様々な形でアエタ族の自立支援事業が行われているようであるが、元来狩猟民族であるため、今後どのように現代社会に順応していくのか大変興味深いところである。

麓の町

1年半の間は、ピナツボ山麓の町アンヘレスに住んでいた。アンヘレスのスペルは「Angeles」。男性にとっては読んで字のごとく「天使」の町？ 詳しくはネットで検索して頂きたい。

現在、町の中心は復興が進み、大噴火の形跡は見られない。しかし郊外では、屋根がなく鉄骨だけになったホテルらしき建物、商店、教会などがそのまま放置されているのが、今でも多数見受けられる。噴火前までのアンヘレスはアメリカ空軍のクラーク基地の所在地であったため、今でも退役軍人や観光客で賑わっており、フィリピンと言うよりもアメリカといった感がある。

クラーク基地は、日本軍占領下の第二次世界大戦中は神風特攻隊の第一陣が飛び立った。戦後、アメリカ軍の支配下となり、ベトナム戦争時には多数の爆撃機が飛び立ちもした。しかし、基地はピナツボ山の噴火後、フィリピン上院がアメリカとフィリピンの軍事基地

協定の延長を拒否したため、フィリピンに返還された。フィリピンがアメリカ軍を追い出したのである。

現在、基地周辺は再開発が進み、クラーク経済特区 (Clark Special Economic Zone) として生まれ変わっており、いくつかの日本企業も進出している。

その再開発の一環として、クラークからスービック湾自由貿易港・特別経済区 (Subic Bay Freeport Zone) までを結ぶ約50km、クラークから約43km北のターラックを結ぶ高速道路が日本の援助で建設された。その建設事業に私は参加していた。

火山灰の道路土工への有効利用

高速道路では、ピナツボ山噴火の際に1兆m³発生したラハールを盛土材として使った。ラハールを地域の発展に役立てていこうというアイデアが、この高速道路建設の起爆剤になった。盛土材に使われたラハールは東京ドーム5杯分の約500万m³で、非常に使いやすく、盛土材のほかにセメントを配合して強度を持たせ、路盤材として活用することが出来た。

嵐の後の現場の恐怖

ご存知のようにフィリピン周辺は台風の発生地域である。滞り期間中にも何回か大型台風が工事途中の高速道路を襲った。高速道路はほとんど未開の地であるピナツボ山麓をかすめて建設されている。この付近では大雨が降ると、未だにラハールが土石流となって山麓の集落に少なからずの被害を与えている。

このような場所に、高速道路の建設とは言え外国人が大挙して訪れるとなると、地元民の感情は複雑だったに違いない。「台風や豪雨による周辺の被害は全て高速

道路建設に起因したものである」と難癖をつけてくる住民が多数いたのである。工事現場では多かれ少なかれこのような対応に追われる。しかし、この地域は場所がら、短刀を携えて喚き散らす人もいれば、ライフルを持って酔っ払って文句を言いに来る人もいる。しかも人だけでなく、猛毒を持ったフィリピン・コブラまで出現する所である。現場でそういう目に何度か遭遇し、身の危険を感じることもあったので、実際の工事を担当する施工業者は大変だろうとつくづく思った次第である。

しかし、こういう人達はこちらが冷静にとことん話を聞いた上で事情を説明すると、意外とその後は親密な関係が築けたりすることが多いのである。あの怒りは何だったんだろうと思うこともしばしばであった。

今後

大噴火から15年、ピナツボの麓は噴火以前よりも発展を遂げようとしている。しかし、その発展とは裏腹に、不利益を被る住民が出てくるであろうことも忘れてはならない。特にアエタ族の問題がそうである。

中部ルソン、ピナツボ山麓の繁栄により、物流の増加、雇用の促進、民生の向上といった多大な利益が生じるだろう。また、低所得者に直接反映しないが、今はこの未開の地に似合わない高速道路が、近い将来には低所得者の生活水準向上へも繋がると考える。

今は何もないが、高速道路が建設されることによってピナツボ山麓が今後どう発展していくのか、高速道路事業にかかわった人間としてとても楽しみである。